

被抑圧諸民族会議（1927年）と参集した人々

理事長 河内 研 一

埼玉版機関紙 9月号より

1955年インドネシアのバンドンで開かれたアジア・アフリカ会議（＝バンドン会議）はアジア・アフリカの「有色人種」29ヶ国の政府代表が集い、「バンドン精神」を練り上げた歴史的会議として名高い。それは非同盟運動の源流ともいわれている。ほぼ時を同じくしてニューデリーで開かれ、アジア各国の連帯委員会の創設を決めた人民の側の国際会議、アジア諸国民会議（15ヶ国の非政府組織代表）とあわせ、バンドン会議とその精神は私たち連帯委員会の活動の原点となっている。バンドン会議を主導したのは独立後間もない国家の首脳たち、即ちインドのネルー、中国の周恩来、インドネシアのスカルノ、エジプトのナセル等であった。

遡ること28年、1927年ベルギーのブリュッセルで被抑圧諸民族会議（2月10日～15日）が開かれた。民族自決が謳われ、戦争に協力したにもかかわらず、第1次世界大戦が終わってみると、アジア・アフリカの諸民族が手にしたものは、独立はおろか巧妙に仕組まれ強化された植民地支配であった。彼らは民族独立に向けて新たなスタート台にもう一度立たねばならなかった。しかし、ロシア革命の成功やコミンテルンの創設、社会主義思想の浸透など、それまでとは違った展望も生まれて来た。社会主義者や共産主義者の尽力で準備されたこの会議もそうしたものの一つといえよう。しっかりと記憶に留めたい会議である。

参加者の中には25歳のスカルノがいた。帰国した彼はこの年、インドネシア国民党を結成し党首となった。中国からは2年前に夫・孫文を亡くし、2ヶ月後には義弟・蒋介石の軍事クーデターに遭遇する宋慶齡（33歳）が参加。仏領インドシナからは阮愛国（グエン・アイコク＝ホー・チ・ミン、37歳）、日本人としては1922年に訪ソし、コミンテルン執行委員会幹部会員となった老革命家の片山潜（67歳）がいた。ヨーロッパの民主陣営からはフランス文学者で平和主義者のロマン・ロラン（61歳）、物理学者のアインシュタイン（47歳）も参加している。そして最後に重要人物、若き日のJ.ネルー（38歳）である。

妻の療養のためドイツに滞在していて会議開催を知ったネルーは即座に行動を起こし、インド国民会議派代表として会議に臨んだ。会議では常設機関として、反帝国主義同盟の設置が決まり、イギリス労働党のジョージ・ランズベリーが議長に就任。ネルーはその執行委員の一人に選出された。そこで彼はインド国民会議派の行動原理を説明し、イギリスのインド植民地支配がエジプトや中国に与えている悪影響を陳述した。ネルーにとって国際政治への初舞台であった。

この舞台を準備したのが名門一族の出身、あのサロージニー・ナーイドゥの弟である。彼については何れ改めて。